シリーズ特集 オートプシー・イメージング（Ai）第六弾

Scene Vol.10 迫りくる多死社会とAiの役割――社会インフラとしての現状と今後の展開

Ⅶ 海外におけるオートプシー・イメージング（Ai）の最新事情

2. ISFRI 2016に参加して

村上　友則　長崎大学大学院医歯薬学総合研究科展開医療科学講座放射線診断治療学

ISFRIとは

ISFRI（International Society of Forensic Radiology and Imaging：国際法医画像学会。和訳は筆者による）は，2016年で5回目を迎えた法医学関連の画像診断に関する国際学会の学術集会で，毎年5月に開催されている。ヨーロッパ各国（スイス，イギリス，オランダ，ドイツ，フランスなど），アメリカ，オーストラリア，日本，韓国などから医師や診療放射線技師，司法関係者など多職種の参加者があり，法医放射線学領域の講演，発表，討論が行われている。前回からは，国際法医放射線技師会（以下，IAFR）との共同開催となっており，2016年も5th Congress of the International Society of Forensic Radiology and Imagingと11th Annual Meeting of International Association of Forensic RadiographerのJoint Congress 2016ということになっている。IAFRの方が歴史が古く，この分野における診療放射線技師の活躍が見てとれる。

ISFRIに関しては，第1回と第2回はスイスのチューリッヒで行われたが，以降は各国で開催されるようになり，第3回はフランスのマルセイユ，第4回はイギリスのレスター，2016年の第5回はオランダのアムステルダムで開催され，将来的に日本にも誘致して開催すべく，日本からの参加者を増やそうという呼びかけがあった。加えて，2016年11月に長崎大学医歯薬学総合研究科死因究明医育成センターが主催した国際シンポジウム（図1）に招待していた講演者がISFRI 2016に参加していることもあり，筆者はシンポジウム主催者の一人として，挨拶と簡単な打ち合わせをするために参加することにした。放射線科医になってから，これまでに欧州放射線学会（ECR，ウィーン）や北米放射線学会（RSNA，シカゴ）に演題を出した経験は何度かあったが，それ以外の海外学会に参加したことはなく，少し悩んだが思い切ってポスターの演題も出すことにした。

ISFRIと日本とのかかわり

ISFRIと日本の放射線科医とのかかわりは古く，第1回大会（ISFRI 2012）以前まで遡る。2000年頃には，すでに日本からは塩谷清司先生（聖隷富士病院）や髙橋直也先生（新潟大学）などを中心として「Ai：Autopsy Imaging」に関して多数の論文が発表されていた。一方，海外ではスイスのMichael Thali先生（チューリッヒ大学）らのグループを中心として，主に法医学領域から“Virtopsy”に関する論文が多数発表されていた。必然的に研究者同士の交流も生まれ，Michael Thali先生らがISFRIを立ち上げる際には，親交のある塩谷先生を通じて，「第1回の大会にはぜひ，日本からたくさん参加してください」との要請があり，記念すべき第1回ISFRIには日本から十数人が参加し，塩谷先生は招待講演者として講演し，髙橋先生は座長を務めた。日本は，スイスに次いで参加者の多い国だったそうである。

また，同時期にはMichael Thali先生をeditor in chiefとして学会誌（*JoFRI: Journal of Forensic Radiology and Imaging*）も作られ，法医放射線学を専門とする国際的なジャーナルが誕生した。現在もなお，飯野守男先生（鳥取大学）はassociate editor，塩谷先生，髙橋先生はeditorial boardとして名を連ねている。

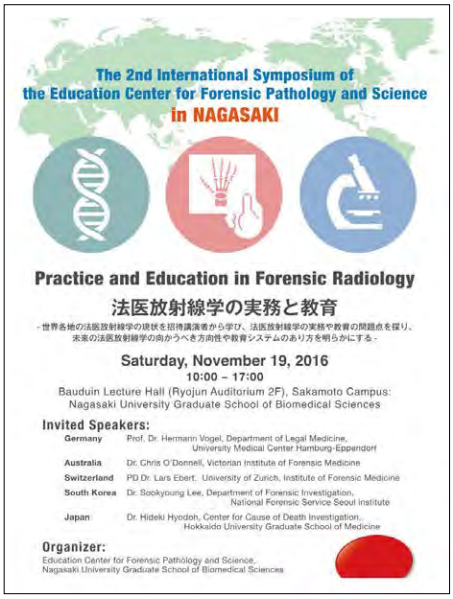

図1　長崎で行われた国際シンポジウムポスター
ISFRIの副会長であり，ISFRI 2018の大会長であるChris O'Donnell先生（ビクトリア法医学研究所）や，*JoFRI*のeditorial boardを務めるLars Ebert先生（チューリッヒ大学）らが招待講演者として名を連ねる。